

論文の内容の要旨

論文題目 統合失調症のある当事者をケアする家族に対する精神科訪問看護師による簡易的な家族心理教育の効果：クラスター無作為化比較試験による検討

氏名 安間尚徳

序文：統合失調症のある当事者をケアする家族は多くの介護負担感を抱えている。家族心理教育（Family Psychoeducation; FPE）は家族の介護負担感を減少させるが、長期間の実施が必要であること、スタッフの確保とトレーニングが困難であること、費用面の問題などから、日常的な臨床現場での普及は未だに不十分である。そのため今後は、簡易的で、既存の精神科医療システムの中で実施可能な FPE の開発とその効果検証が求められている。簡易的な FPE として、Brief Family Psychoeducation(BFP)が介護負担感の減少に効果を示すことが複数の無作為化比較試験（RCT）で報告されているが、コンタミネーションによる介入効果の減弱や、個人々の能力や地域特性による外的妥当性の低下の可能性、追跡期間が短く長期的な効果が不明であることが限界となる。また、先行研究のいずれもが既存の精神科医療システムの中で検証されていない。本研究の目的は、精神科訪問看護師が提供する BFP が、統合失調症のある当事者をケアする家族の介護負担感を減少させるかに関して、6 ヶ月間の追跡期間を設けた cRCT により明らかにすることである。

方法：研究デザインは cRCT である。47 の精神科訪問看護ステーションが研究に参加し、BFP 施行群（介入群）、通常の治療群（対照群）に無作為に割り付けられた。精神科訪問看護師が統合失調症のある当事者をケアする家族を、研究者が作成した乱数表に沿って、リクルートを行った。介入群は、精神科訪問看護師が 1 回 60 分の BFP を、週に 1 回、計 4 回施行した。主要評価項目は、家族の介護負担感とし、日本語版 Zarit 介護負担尺度を用いて測定した。効果評価は、ベースライン、ベースラインから 1 カ月後、ベースラインから 6 カ月後に行った。介護負担感に対する BFP の効果を検討するために、線形混合モデルを用い、Intention-To-Treat 分析を行った。

結果：34 の精神科訪問看護ステーションと 83 人の統合失調症の当事者をケアする家族が本研究に参加した。研究参加者の脱落率は 20%以下であった。介入群のすべての研究参加者は 4 回とも BFP を提供された。対照群と比較して、介入群では、6 か月後調査（調整済み平均差 [aMD] = -2.12, 95%CI = -7.80 ~ 3.56, p = 0.45, Cohen's d = 0.11）において介護負担感の減少を認めたが、統計学的な有意差は認めなかった。

結論：精神科訪問看護師が提供する BFP は、家族の介護負担感を有意に減少させなかった。一方で、BFP の介入群の研究参加者全員がすべてのセッションに出席した結果は、精

精神科訪問看護師が提供する BFP の実施可能性の一部を示しているとし唆される。今後は、サンプルサイズを満たし、より介護負担感の高い家族も含めた研究対象者に対して、c RCT の実施が求められる。また、BFP の改良やフィデリティ作成による質の担保、精神科訪問看護師への研修内容の再考や効果検証を行う必要がある。